

祖父が私に 残してくれたこと

ジャム工房 緑夢（ミドリーム）ファーム
代表 寺町 敬子

◆ 思い出話…

はじめまして。寺町敬子と申します。
小さな農家のかあさんです。

私のような普通のおばさんが、この場に載って良いものか…少し申し訳ない気も致しますが、ほんの少しでも、農に携わる女性の気持ちを伝える事が出来るのであれば、と思いますので、今年一年よろしくお願いたします。

少し、私の思い出話にお付き合いください。

◆ 祖父に背を押されて

私の祖父は、馬車を作っていた職人でした。

私が物心つく頃には、馬車を作ってはいませんでした。広い作業場には道具がきちんと整頓され、鍛冶場もあったのを覚えています。

街の中で育ったので、その頃の農家の暮しがどのようなものかは知らなかった

のですが、昭和四〇年頃からトラクターが導入され始め、祖父の作る馬車・馬そりなどは使われなくなり、仕事場を閉じたのもその頃だったのではないかと思います。

* * *

馬車製造の仕事がなくなることを見越



左から3人目が祖父―昭和15年前後の写真

寺 町 敬 子 (てらまち けいこ) さん



☆家族経営の畑作農家

☆夫・私・長男の三人で、約26ha（玉ネギ・小麦・ビート・小豆）規模の農業を営んでいます。

☆信金職員として勤務の後、夫と結婚し農業に従事。

平成7年地元の仲間と共に、『ところよめさんねっとわーく・さくらちゃん』を結成。

☆平成15年緑夢（ミドリーム）ファームとして、自家栽培の果実・野菜を使い農産加工を始める。

☆“農の暮しは、楽しい！”を、コンセプトに活動中です。

北海道女性農業者倶楽部（マンマのネットワーク） 副会長

北見市社会教育委員

北見市常呂自治区社会教育推進会議 会長

し父は勤めに出ていましたので、普通の家庭と同じだと思いますが育っていた、と思っていました。が今思い出すとかなり変わった家で育った感じがしています。

明治生まれで、職人気質、かなりの頑固者だった祖父、転じて言えば、やりたい放題のわがままな人だったので祖母や母は大変な苦労してきたと、今にして感じています。

生き物が好きだった祖父は、使われなくなった作業場などを改造して、いろいろな生き物を飼っていました。

豚・犬・鶏・チャボ・キンケイ

鳥・うぐいす・うそ・九宮鳥など、観賞用から食べるための生き物で、圧巻は、親鳥から逸れた鴨のヒナを育て大きくなった頃に食べてしまったのには、逞しさを感じてしまいました。ただし、子供だった

私の口には入りませんでした。

他にも、金魚・鯉・熱帯魚などもさすがに、これらを食べたのを見たことはありませんでしたが。

馬車屋を営んでいた関係で、農家らしい人が頻繁に訪ねて来ては祖父と茶飲み話に花を咲かせていたのを思い出します。お客さんが来ていると、必ず膝を折って挨拶しなければ怒られるので、誰かが来ているような気配の時はなるべく側に寄らないようにしていました。が、母に欲しい本などをねだることが出来ない時だけ、孫の私には甘い祖父の後ろについて離れなかったのを思い出します。幼いころからちゃっかりしていたのかもしれない。

私が、農家の人と結婚するという事を話した時、反対する父母との間に入り「農家は良いぞ、なんたって、喰いっぱぐれがない。」と、喜んでくれました。

明治生まれで、戦前戦後を生き抜き、激動の昭和をやり過ごした祖父にとって、

食べ物の保証があるという事は、何よりの安心だったのだと思います。

そんな、祖父も四人のひ孫をみて、八四歳の生涯を閉じて二六年になります。

祖父の人生が幸せだったのか知る術はありませんが、祖父が背を押してくれたので今の私がいるのは間違いなく、私自身が農家で良かったと思える生き方をしていきたいと思っています。

◆変わりゆく『暮らし方』

私が結婚した頃は、二世帯などという意識も言葉も無い、一緒に暮らすことも乳呑児を預けて畑に出るのも当たり前時代でした。周りの殆どがそんな暮らし方だったので、そうするのが当たり前と思っていました。

ただ、なんとなく口に出せない違和感がありました。

今でこそ、若夫婦とは別世帯にし、あの程度の時期まで子育てをするやり方や、自分の職を持っているという女性が増え

てきました。『農家の嫁』という生き方を押し付ける事が無くなったのも、諸先輩たちの反省のもとに、それぞれの暮らしを尊重し合う暮らし方が認知されてきた結果だと考えます。

ただ、三世代同居の良いところも沢山ありました。

家族全員が囲む食卓で子供たちは、学校では学ぶことのできない事を身に付ける事が出来たはず。理屈ではない、行儀や食べ物に対する考え方や行事の意味、さりげない優しさの意味、年老していく過程、いのちの大切さなど、他にもあると思いますし、核家族でも十分に学び取れることはできると思いますが、生きてきた時代が違ったり、価値観が違う人達が家族というごく小さな集団から、社会性を身に付ける事が出来ていたような感じがしています。

* * *

共稼ぎの家庭で育った私は、明治生まれの祖父母から厳しく躾られたと感じて

います。好き嫌いはもちろん食事を残しては叱られ、お客さんには必ず挨拶させられ、大人が楽しげに話をしているところに、割り込んだ時には「子供が大人の話しているときに口を挿むな」とよく叱られていました。

小学高学年くらいの頃だったと思いますが、お風呂の中で当時の流行歌を大きな声で歌っていると、お風呂の外から大きな声で「子供が歌う歌じゃない！恥ずかしい！」と言われ、自分でも恥ずかしくなり中々お風呂から上がることが出来ずに困ってしまいました。

叱られてばかりではなく、寒くて手足がかじかみ、泣きながら学校から帰ると、私の手や足を優しくなでながら温めてくれた祖母の皺だらけの手の温もりなどは、昨日の事の様に思い出します。

母が仕事に出る前に作っておいてくれたおやつのカボチャ団子を、ストーブで焼きなおしてくれたりと、厳しくも優しい祖父母でした。

* * *

新天地を求め北海道に渡り、馬車製造所を開業し、戦中戦後の物のない時代をくぐりぬけ、馬からトラクターに変わった時の流れの中で、時代に取り残され年老いた職人。

それでも、気質を変える事が出来ずに晩年もわがまま放題だった祖父。

今でも、「あんたのじいちゃんの作る馬車は、丈夫で使い勝手が良かったんだよ。」と、話してくれた人がいたのは、驚きと共に少し誇らしく感じた事がありました。

農家ではなかったものの、農家の人達が必要としていた道具を、使う人の気持ちに寄りよって丁寧に作っていたのだとこの歳になって判りました。

そんな祖父はなかなか面白い人でした。

* * *

自分も孫がいますが…、私も私の祖父母の様に、きちんと愛情をもって叱るときは叱り、ただ甘いだけの存在にならな

い様にしようと思っています。(孫を目の前にして出来るかどうか自信はありませんが)

* * *

私は、運命論者ではありませんが、外から見ると夫婦は『あてがったように



私の住む北見市常呂町

なっている』と思えるのです。友人などと話をしていると、ちゃんと隣に寄り添っているパートナーが最良の人なのだと思います。

苦勞や喜びは、お互いが寄り添えることが最低条件で、それをクリアするとよい最後を迎えられるのではないかと思うのです。それも、きつと祖父母や父母の生き様を幼いながらも見てきたからなのではないかと思うのです。

昼間から喧嘩していたのに、夜には笑いながら食卓を囲んでいる。それは『家族』だからこそ出来ることですから。

そのような事を思いながら、もうじき、畑でも作業が始まります。

昨年は、例年よりも一〇日以上遅れた春の移植作業ですが、今年は順調に作業が進むことを祈ります。